

II 課題文型記述課題①

サンプル

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一人の人間が、調和のとれた状態を常に保ちつつ、成長できるものであろうか。いつの時代でも、あとから見ると、大きなアンバランスがあったと判定され得るのではないか。

第二次世界大戦後、日本の経済状態が険悪になり、幼児の中にさえ、世間の荒波をまともにかぶらねばならなかった者が少なくなかった。少年が、青年が、社会的関心を抱くようになったのも当然である。

それにくらべれば、私の少年時代などは、少なくとも私個人にとっては、平和なものだった。親のすねをかじっていれば、学校には行けた。学生のアルバイトなどというものは、存在しなかった時代である。もっとも、現代の一部のハイ・ティーンに見られるような風俗の原型は、当時もなかったわけではない。堅実な家庭の親たちは、彼らを「不良」と呼んだ。不良少年、不良青年などという言葉が、よく使われたが、余り深刻なひびきを帯びていなかった。三高の学生の中にだって、その程度の不良はいたはずである。

一方ではまた、自分たちの置かれている社会に対して、はげしい批判の目を向ける青年も、たしかにいた。

彼らは、私よりはるかに大人であった。年齢的にいって、私は三高生の中の最年少ではあったが、性格的に見ても彼らは私より、社会に対する関心が強かったにちがいない。私の知らないことを、ずいぶん知っていたはずだ。私はそれを とも思わなかった。私が、私のエネルギーをほとんど読書と、それにつながる思考の中にだけ注ぎこんだということは、たしかに人間としての成長過程では不調和なことであった。バランスのとれていない少年だった。この傾向は今も私の中に残っているが、——私はそれを人間として立派なこととは思わない。が、もしこのアンバランスが私になかったら、どういうことになっていたろうか。私が物理学の研究者としては、割合早く一人前になれた理由の一つとして、この不調和な、かたよった人間形成が大いに力があつたのではなからうか。

私は少年期から青年期に移るころの自分を、その年齢なりに円満な、調和のとれた人間だったと思うことは出来ない。が、①私自身にとっては、それはむしろ幸運であつたといえよう。

世間的には大変に無知でありながら、とにかく私は、むつかしい本を読みたがった。

三高の図書館で、最初、熱心に読み出したのは、哲学の書物である。老荘の哲学から西洋の哲学へ、私の興味は移っていった。

新カント派の全盛時代であつた。一方、ベルグソン哲学も人気があつた。しかし私は、当時の多くの青年と同じように、西田哲学にもっともひかれた。

ところが、哲学に対する興味の底から、二十世紀の物理学に対する好奇心が、徐々に頭をもたげはじめた。田辺元博士の「科学概論」や「最近の自然科学」の方が、純粹の哲学書より面白くなっていった。

数学に対する興味は、中学時代より幾分、うすれていた。中学では、自分で考えればよかつた数学が、やや暗記物的な色彩をおびて来たからである。代数では、次から次へとい

ろいろな公式を教えられる。それを覚えておかないと、次へ進めない。幾何の方は、立体幾何だ。これもユークリッド幾何であるから、論理性ははっきりしている。ところが問題は、それを教えてくれる先生にあった。

サンプル

立体幾何を担当している先生の講義は、講義としては充実していた。それは私も、認めていた。ただこの先生は、学生の全部が、一字一句ももらさずにノートしていないと、きげんが悪い。しかも、講義のスピードは非常に速いのだ。よほど注意していないと、ついて行けない。

三高へ入って間もなくのことである。

この先生の時間中であつた。聞きとれない所があつて、私はふと手を休めた。まだ、なれていないせいもあったかもしれない。しかし、手をとめている私を、先生は目ざとく見つけ出した。

「小川君、何をしていますか？」

とげとげしい目であつた。きつい声であつた。クラスの者全部が、はっとしてペンをとめた。私は、周囲の視線が自然とこちらに注がれるように感じた。顔を伏せて、ペンを握りなおす。すると先生は、自分のひとことが学生たちに与えたショックを完全に黙殺して、——むしろ、それに満足して、前よりも速いスピードで、講義をつづけ始めるのであつた。まるで意地になっているようであつた。私は二、三行の空白をのこして、必死になってそれを追って行った。

——その時は、先生の度を越した厳格さに反発する気持を、起すだけの余裕もなかった。が、授業がすんでしまつてから、私はなぜ、それほどまでに語気つよく注意されねばならなかったのか、よくわからなかった。②これでは数学でなくて、軍事教練と同じだと思つた。

(中略)

一高、三高の対校戦が終ると、すぐ第二学期が始まる。京都をめぐる山々はまだ夏の色だが、集つて来る学生たちは、何か新鮮な空気を身につけているように見える。

古びた校門を通りながら、

「よう！」

「よう！」

と声をかわす。それだけの言葉にも、若さがこもっている。

夏じゅう、京都の町を出なかつた男もいる。故郷に帰って、真黒に日焼けして来た顔もある。話題は多い。学生たちは、休暇中の出来ごとを楽しそうに報告し合いながら、さまざまな期待に胸をふくらませている。が、始業の鐘が鳴り渡ると、ふっとひとすじ、不安なものが彼らの中にも流れるのだった。

新学期の最初の授業時間には、各先生がそれぞれ、自分の学科で注意点をとつた者の名前を読み上げるのだ。六十点以下は、不合格である。六十点から七十点の間が、注意点である。発表される前に、覚悟をきめている者もある。が、危い一線を、はたして越えているかいがないか、心穏かでない者も少なくない。

立体幾何の時間であつた。

注意点をとった者は……」

先生は一度、教室じゅうを見渡し、早口に氏名を呼び上げていった。何人目かに、
「小川……」

サンプル

という名がその口から出た時、私は自分の耳をうたがった。一学期の試験は、全部出来ているつもりだったからだ。信じられなかった。何か、採点の誤りではないかと思った。

私はこの時の驚きを、いまでもはっきりと思い出すことが出来る。先生の返してくれる答案を手にするまで、半信半疑であった。が、——答案を見ると、三問中の三番目が、たしかに零点になっている。従って点数は、はっきりと六十六点である。私は急いで、私の解答を検討して見た。証明は、どこも間違っていない。ではなぜ零点なのか？ 私は友だちにも、きいて見た。友だちも私の証明の正しいことを認めた。しかし、一人のクラスメイトは、

「それはね、先生の証明のしかたと違うからだめだったんだ」と言う。

「あの先生はな、自分の講義中にやった証明の通りにやらないと零点なんだ」

そう言われれば、私はもう言うことはなかった。なるほど、私は先生がどう解いたかを憶えていなかった。それで、別の解き方をしたのだった。私は、私の証明が間違っていなかったことに安心した。もう点数はどうでもよかった。しかし数学に対する興味がいっぺんに冷却してしまった自分を、どうすることも出来なかった。

私を数学の道から簡単に追い出したのは、この時の先生の採点の仕方だった。少年はいきり立って、もう数学者には絶対になるまいと決心した。先生に教えられた通りに、答えなければならない学問。そんなものに一生を託すのは、いやだ。——

(湯川 秀樹『旅人 ある物理学者の回想』角川ソフィア文庫)

設問

問1 文中の□に入る言葉としてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア にくたらしい イ うとましい ウ うらやましい エ すばらしい

問2 ①——線とありますが、筆者にとってどのようなことが幸運だったのか。説明しなさい。

問3 ②——線とありますが、筆者はどうしてそのように思ったのか。説明しなさい。

問4 筆者の学問に対する考え方に触れながら、自分にとっての学問とはどのようなものなのか、400字以内で書きなさい。

II 課題文型記述課題②

サンプル

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

嘉納治五郎^{かのうじごろう}が何を日本に教育しようとしたかという、ひとことで言えば「精力善用」と言えます。これは彼自身が掛け軸にして残している言葉です。文字だけを見ると、たんに精力をよいことに使うという意味にしかとれません、そうではなくて、精力の最善利用ということです。その最もよい利用の仕方が「自他共栄」です。

だから目的は「自他共栄」であり、原理は精力の最善利用ということです。治五郎はこれを柔道の根本原理とただけでなく、一般生活のすべてに通じる基本原理として身に付けさせようとしたのです。

柔道といえば「柔よく剛を制す」という有名な言葉を思い浮かべますが、嘉納治五郎自身は、「柔よく剛を制す」は根本原理ではないと言っています。もちろんそれが大切ではないというのではなく、①「精力の最善利用」という概念のほうがより重要だと言っているのです。

なぜなら「柔よく剛を制す」は、常に相手に対してどのように対応するかが焦点になっていますが、戦いにおいては、いつも相手の出方次第ということはありません。自分から動かなければならない場合もあるからです。

私は柔道の研究を始めてから四十余年、その間絶えず攻撃^{ぼうぎょ}防禦の百般の場合につき工夫し、遂にそれらの間に一貫した原理があつてしかもそれは精力の最善活用にあるということを確認するに至った。

(『嘉納治五郎著作集第一巻』)

そうして、「昔は柔術は柔能く剛を制するという道理に基づいて」行われていたが、柔道の勝負にはそれ以外の理屈があるのではないかと述べています。

「何事をするにも、その目的を達するために精神の力と身体のとを最も有効に働かすということ」が重要であつて、「精力の最善活用ということは、柔道の修行上最も大切な教えであるが、また人生各般の目的を達するためにも必要な教えである」(前掲書)と言っています。

興味深いのは、その精力善用ということ、交友や読書に生かす方法などについても詳しく述べている点です。たとえば読書に関しては、要領を記憶して、それらを忘れないようときどき繰り返さなければならないとか、覚えにくい漢字は書きつけておいて、何度も字引を引く手間を省いたほうが良いとも言っています。

要するに柔道も生活も、すべてに共通するのは、精力の最善活用の仕方を考えることだと言っているのです。

治五郎がこの精力の最善活用を思いついたきっかけは、どうやら柔道ではなかったようです。『嘉納治五郎』(日本図書センター)によると、彼が東京開成学校に進学したとき、同じクラスに白石直治という優秀な人がいたそうです。よく勉強ができるのですが、いわゆる

るガリ勉ではない。

きっと何かうまい方法を使っているに違いないと注意していると、白石君は時間の使い方が実にうまかった。予習・復習のやり方が上手で、無駄な時間を省いて上手に有効活用している。白石君ができる理由はそれだったというので、これがヒントになって「精力善用」に結びついたようです。

□ A □、工夫し続ける精神のあり方を思いついたわけですが、考えてみれば、ここまで広く応用すれば、「精力最善活用」は一般的な原理としても通用します。しかし、それを柔道の技として徹底してみようという発想は、やはりすぐに浮かんでくるものではありません。

つまり嘉納治五郎は、あらゆるときに最善の力をどう活用するのか、練習方法としてエネルギーの最善活用はどうあるべきかを、柔道の世界で突き詰めていこうとしました。しかもその結果を、誰の目にも疑いようのない勝敗という形で確認しようとしたのです。

□ B □、そうした試みを、読書や交友関係、社会的な能力など、すべて「精力善用」につないでみようと考え、日本人の得意技であるかのように浸透させようとした点が面白いところだ。

彼自身も言っていますが、アメリカは資源があり、人口も多い。しかし日本は、国土が狭く資源もない。では日本人に何があるかということ、工夫する気持ちがあります。小さなことにも工夫し続けるところがあり、そのことによって初めて日本人の良さが生かされる。それこそが「精力善用」の精神というわけです。

西欧との比較について、治五郎は「日本人が陸海軍を建設した能力、商業において、工業において、財政経済や一般行政において発揮した能力は決して世界に恥ずるところはない」（『嘉納治五郎著作集第一巻』）と捉えていましたし、肉体系においても、「最も大切なことは如何に器用に筋肉を働かせ得るかということと、何程の持久力を有するかということであって、それらにおいて日本人はかなり優れた素質を有しているということが分かった」（前掲書）と言っています。

ここで言う「器用に筋肉を働かせ得るか」ということは、身体の働き方を研究することと密接に結びついています。すなわち自らの工夫で研究し、持っているエネルギーを最善に活用する方法論的視点を持つということです。

□ C □、教えられたことをそのままやるのではなく、自分はどのようにしたらエネルギーを最善に活用できるか工夫せよと言っています。その技を、身体をとおして日本人に身につけさせたのが、嘉納治五郎の行った教育だといえるでしょう。

考えてみれば、日本という国がNHKの番組「プロジェクトX」に代表されるさまざまな工夫を成功させたのは、ほとんどすべてが「精力の最善活用」によっています。たとえばウォッシュレットを見ても、あんなに細かく工夫し、新製品をつくり続けているのは日本らしい。工夫しすぎるほど工夫していて、もうこれ以上、工夫するところはないと思えるほどです。

そうした営みの中に、日本の遺伝子が詰まっていると思います。本当に、よくこの人的エネルギーを結集してここまで来たものだと感心するほかありません。

それは文化的な遺伝子というほかなく、長い歴史をかけて人々がつくり、確立してきたものです。治五郎はそれを、武道という形で明治の日本人の身体に染み込ませようとした

わけです。

②遠大な目的意識なしには生まれようのない発想です。そのことをもって、彼は「志」と言っています。彼は、日本人全部が「志」を持たなければいけない、強く主張しました。

人は誰でも志士でならなければならぬ。人としてこの世に生まれて空しく生きていて、何も世のために尽くさずに死んでしまうならば下等動物と何も択ぶところなく、万物の靈長ということは出来ぬ。(前掲書)

その志とは、孫を育て上げることでもいいし、慈善事業をすることでもいい。「子供でも老人でもその境遇において尽くすべき自他共栄の方法があり、すべての人はそれを実行せねばならぬ」と言い、自分でその方法を考えて、精力を善用しなければならぬと書いています。

(齋藤 孝『代表的日本人』ちくま新書)

*嘉納治五郎

柔道家・教育者。柔術諸流を集大成して近代柔道を創始。講道館を設立。東京高等師範学校校長を務め、体育教育全般の発展にも貢献。日本の初代 I O C (国際オリンピック委員会) 委員。

設問

問1 文中の 、、 に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ もちろん ウ したがって
エ 要するに オ しかしながら

問2 ①——線に『精力の最善利用』という概念」とあるが、これと同じ意味の言葉を八字で抜き出さなさい。

問3 ②——線に「遠大な目的意識」とあるが、それはどのような「志」だろうか。説明しなさい。

問4 筆者の考え方に触れながら、あなたにとっての「精力善用」について、400字以内で書きなさい。

II 課題文型記述課題③

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サンプル

日本人の学生たちに、敬語に関する課題を出した。外国人に敬語を教えるための会話文を作成するというものである。提出物に目を通し始めてすぐに、①課題の立て方を誤ったことに気づいた。

敬語は大ざっぱに言って、聞き手または話題の人物を敬う尊敬語、へりくだることによって相手への敬意を表す謙譲語、「です・ます」の形をとる丁寧語の三種類に分けられる。

たとえば、「言う」という動詞の場合、尊敬語は「おっしゃる」、謙譲語は「申す」、丁寧語は「言います」となる。このように丁寧語も敬語の範疇に入るが、一般に敬語と聞いて思い浮かべるのは尊敬語と謙譲語であり、「敬語の使い方を知らない人が増えた」「適切に使えないとコミュニケーションに支障をきたす」、もしくは「日本語の国際化のためには不必要な語法だ」などという議論が戦わされるのもこの二つをめぐってである。

日本語教育を学んでいる学生に対して出した「外国人学習者に教えるべき敬語」という課題も、尊敬語と謙譲語を念頭に置いてのものであった。場面設定は自由で、教授と学生の会話、上司と部下の会話、初対面の人同士の会話、就職試験の問い合わせの電話での会話など、さまざまな場面でのやりとりが期待された。日本人の学生たちが敬語を縦横に使いこなすことができるかどうかはともかく、知識は有しているであろうと想像していた。

「失礼ですが、お名前は何とおっしゃいますか」「田中と申します」というような会話なら苦もなく作れるに違いない、と。

「ワタシ、あなたの家、行く、いいですか」のような言い方しかできなかった外国人学習者が、初級のレベルを終えるころには「お宅にうかがってもよろしいでしょうか」と言えるようになる。話し手が聞き手に伝えたい内容は同じだが、前者のような言い方をした場合、来日まもないころは「日本語お上手ですね」とほめられ、少したつと、「外国人だからしかたがない」と苦笑され、しまいには、「あんな言い方しかできない」と馬鹿にされる。言葉づかい一つで人格に対する評価まで下されるのは日本人でも同じだが、外国人学習者が日本語のコミュニケーションにおいて不利益をこうむらないようにするのが日本語教育の目的の一つであり、その意味でも必要最低限の敬語の習得はおろそかにできない。教室のなかでさまざまな場面を想定し、それぞれにふさわしい複数の例文を提示するのは日本語教員の役目である。日本人大学生に課したのも、そのための例文を作る練習だった。

ところが、大多数の学生が書いてきた会話文は、場面も内容も似たり寄ったりのものだった。ほとんどがファストフード店、ファミリーレストラン、居酒屋、コンビニエンスストアのレジといった接客場面での店員と客とのやりとりであった。「敬語を使った会話」という課題を与えられた彼らが、まっさきに思い浮かべたのがそれらの場面だったのだ。このことは、学生たちが最も親しんでいる、そしてほぼ唯一の敬語使用の場が、ファストフード店や居酒屋などであることを物語っている。

学生たちの作ってきた会話は、日本語を学ぶ外国人に教室でどうしても教えなければならないものではなかった。客の人数を確認したり、タバコを吸うかどうかたずねたり、飲

食物の注文をとったり、金銭の受け渡しをしたりする際の表現を覚えることも無駄ではないが、それらより優先順位の高い敬語表現はいくらでもある。

しかも、そこに並んでいるのは、「おタバコのほう、お吸いになりますか」「こちらレシートになります」「〇〇円からお預かりします」「お持ち帰りでしたらよろしかったですか」等々、耳障りな接客マニュアル語として非難されることの多い言い回しばかりだった。学生たちにこれらの表現を使用する理由を問うと、②困った顔をして沈黙する。まれに返ってくるのは、「お客さんに失礼のない言い方だと思うから」「そういう決まりだから」という答えであった。

おそらく、疑問に思ったことがないのだろう。たとえあったとしても、その疑問をだれかにぶついたり、本や辞書に当たったり、自分で突き詰めて考えたりしていない。アルバイト先でそのような教育を受けた場合に、なぜそう言わなければいけないのかと店長に質問する者はいない。言われたことを素直に受け入れる。上司の心証を害したくないから、仕事を失いたくないから、と黙っている者もなかにはいようが、大半ははなから疑問を感じていないようだ。

上から与えられたことに対して疑問をさしはさまないように、余計なことを考えないようにとつけられてきたのだろう。わいてきた疑問を封じ込め、疑問に思わないように努め、言われたことに従っているうちに、本当に何も感じなくなってしまうのかもしれない。思えば、与えられたことだけをこなすのは案外、楽なのだ。文句を言わずに従っていれば生活は安泰だ。

自分で考えて調べたり創意工夫をこらしたりするのは労力を要する。楯突くとなると、もっと多くのエネルギーを必要とする。それならおとなしくしていようと、彼らなりの処世術を身につけた結果なのだろう。

敬語を知っているかどうか、また使えるかどうかということについては、大人もそうだが、一八歳の大学一年生でも、個人差がきわめて大きい。育った環境が影響することは否定できないが、たとえ家庭や地域や学校で敬語を身につける機会に恵まれなかったとしても、本人の自覚と関心さえあれば、覚えることは可能だ。敬語に関するハウツー本をひもどくのもよいが、小説や映画などに接して「敬語体験」を積むことができる。もっとも、自覚と関心は、何もなかったところにある日突然わき出てくるものではない。そう考えると、③自覚と関心をもたらす土壌を耕しておくという意味で、環境の整備が大切だということになる。

いずれにせよ、敬語イコール接客用語であった学生たちにとって、「敬語体験」の場は家庭でも地域でも学校でも書物のなかでもなく、サービス業の現場だったのである。

(野口 恵子『かなり気がかりな日本語』集英社新書)

設問

問1 ①——線とありますが、筆者が失敗したと感しないようにするためには、どのような課題の立て方が必要だったと思うか。説明しなさい。

サンプル

問2 ②——線とあるが、学生はどうしてそのような態度をとったのだろう。説明しなさい。

問3 ③——線とあるが、あなたの考える「土壌」とはどのようなものだろう。簡単な言葉で挙げなさい。

問4 筆者の考え方に触れながら、あなたの考える敬語を用いる意義について、400字以内で書きなさい。